県立の他校と遜色なく

藤村　清一（旧8回生）

小生らが岩中第八回生として入学したのは岩中が発足したばかりで、初代校長が辞任し、二代校長が演説途中に倒れるという非常事態の中で行われるという、八回生としては今後どのように推移して行くか心配される途中であった。

八回生の出身地を見ると盛岡市は無論のこと岩手郡、紫波郡、宮古市、岩泉町等一〇〇余名という多彩さであった。

小生は本宮がまだ盛岡市に合併する以前であったから、本宮小学校からただ一名、それも自宅から近いというだけでの理由であった。入学して回りを見回して見ると、われわれの回級生は国鉄関係の子弟がかなりに上っていることが解った。

八回生はスポーツ関係では特別に優れている種目は少なかったが、学業関係では陸士三名、高農関係三名その他各施設に多数が続き、花の八回生と言われたものである。

思えば、今回の戦争であたら優秀な人材が多数国家のために生命を捧げて逝ったものである。卒業時六〇余名であった同級生は、現在同級会を開催しても、十四、五名しか参加者がいないということを見ても判明しよう。

一年生に入学したとき、担任は牟岐喆雄、山中順三両先生であったし、他にも若い先生がたくさんいたし、これでは県立の他校と同等に比べても遜色なく行けると思ったものである。間もなく佐々木哲郎校長も着任したし、態勢は着々整って来た。

一年生を修了し、二年生になって驚いたのは組の半数近くが原級差止め、いわゆる落第という事態で、このことは毎年に及び、五年修了時には入学時の半数近くまで達したことで、岩中精神の高揚という事態であった。

昭和八年―一二年の五年間は全校岩手登山という岩中精神が発揮された時期であり、奉安殿を大沢川原より現在地の長町田圃まで搬送したのは、五年生の冬休み期間に盛岡の街路を移動したものであり、現在の校舎での授業は小生ら第八回生は体験しなかった。

昭和五二年四月校舎炎上、新校舎建設と同窓会員からの義損金の拠出、校舎の完成と授業開始―五三年八月、敗戦とこれに伴う学制改革―によって民主化された学園と岩中―岩高と現在の新生期、雄躍期については他の筆者がふれることであろうから割愛することとする。

岩中が創設されて七〇年、小生もその中の一員として過ごして来たのであるが、七〇年の歴史をふり返って、感無量のものがある。

小生らの在学生時代、どうしても当時の盛中生現在の一高生に学業ではかなわなかったことであり、これは色々原因があろうが、現在はどうなっていることであろうか。

昭和13年当時の職員室